第２５回　藤枝市総合教育会議議事録

令和５年１０月１１日

藤枝市教育委員会

第２５回藤枝市総合教育会議教育委員会

令和５年１０月１１日（水）
市役所西館３階　特別会議室

１　開　　会　　午後２時３０分

２　協 議 事 項
（１）令和５年度「教育日本一」に向けての取組
　　英語教育の推進について

３　報 告 事 項
（１）部活動の地域移行について

４　構　成　員

職　　名		氏　　名
市長		北村　正平
教育委員会	教育長	中村　　禎
	委員（教育長職務代理者）	野中　　進
	委　員	永田奈央美
	委　員	永田恵実子
	委　員	福與繁太郎

４　出席した事務局職員

教育部長	杉原　一行
教育政策課長	金原　雅之
学校教育監	小山　純一
主席指導主事	安藤　厚志
学校給食課長	堀田　匡
生涯学習課長	小西　ゆう子
図書課長	杉本　守
指導主事	田中　裕史
総務係長	田中　英忠
書記	石川　聡美

５　傍　聴　者　　１人

６　意見の概要　　別紙のとおり

７　閉　　会　　午後３時４０分

○市長あいさつ

本日は第２５回藤枝市総合教育会議にご参集いただき感謝する。新型コロナウイルス感染症は、今年５月から、季節性インフルエンザと同じ「５類」に移行したが、学校では８月末から９月までインフルエンザなどにより学級閉鎖があったと聞いている。

１０月から新たな教育委員として福與委員が加わった。福與委員は校長経験もあり、現在は、せとやこども園の園長でもあるので、現場の状況を踏まえた的確なご意見をいただきたい。

本日の議題は『英語教育』ということで、特別支援教育やＩＣＴ教育と同様、本市が特に力を入れている施策になる。英語教育の中でも、「話す」「聞く」の分野は、グローバル化した現代社会では、自分の意見を表現する能力でもあり、極めて重要である。本市でもＡＬＴの充実を図り、話すことを意識づけた楽しく学べる英語教育の充実を図っている。私は、英語が好きな子ども、苦手な子ども関係なく、中学卒業までには外国人に対して構えることなく、簡単な英会話でも構わないので、気軽にコミュニケーションを図れる力を育んでもらいたい。

本日はそのほか、８月から移行を始めた部活動の地域移行に向けた取組についての報告がある。限られた時間での協議となるが、皆さんの忌憚のない意見を聞きたい。

○教育長あいさつ

教育委員の皆さんには学校訪問をしていただいている。平均して委員一人当たり１６校訪問している。先日、ある学校に訪問したが、翌日その学校で学級閉鎖が発表された。皆さんも体調には気を付けていただきたい。教育委員の皆さんには、先月、大洲中学校で開かれたＦＣＣの視察もしていただいた。本日の議題は英語教育の推進についてということで、委員の皆さんの忌憚のない意見を聞きたい。

○協議に関する意見

（１）令和５年度「教育日本一」に向けての取組

英語教育の推進について

市　長：本市では「教育日本一」を掲げている。「教育日本一」とは、現場の教員が子どもと向き合う時間を増やし、働きやすくするために、法律や体制を整備することだと考える。資料の１３ページを見ると、「英語の勉強は好きですか」の質問に対する肯定的な回答が小学生と中学生で大きな差がある。小学生は「英語を話す」ということに対して臆することなく実行できるように、現場のＡＬＴが楽しく授業を展開しているのだと思う。対して中学生については、英語を学ぶ際に楽しさを教えるということができていないのではないか。外国語を学ぶことに関しては、初めが肝心だと思う。以前からお話ししているが、本市の教育は、ＩＣＴ教育や特別支援教育のほか、英語教育に力を入れている。直近２回はＩＣＴ教育と特別支援教育について、教育委員の皆さんと協議してきた。そして今回は英語教育である。令和３年度から始まった現在の新学習指導要領では、英語教育について、授業は英語を基本とし、これまでの「聞く・話す・読む・書く」の英語４技能から、「コミュニケーション能力の素地となる資質・能力を育成すること」を重視し、「話す」を「やりとり」と「発表」の２領域に分けた、４技能５領域とし、それぞれに到達目標が示された。本市もコロナ禍であったが、ＡＬＴの人員に欠員が出ないよう、地域ＡＬＴを活用し、英語教育を推進してきた。また本年度が初年度である第２期藤枝市教育振興基本計画で、英語教育は、政策として「たくましく生きる力の育成」の中に位置付け、英語で日常会話のできる人材の育成に取り組んでいる。先ほど、事務局より、本市の英語教育の取組について説明があったが、社会のグローバル化の進展への対応は、これまでどおり英語さえ習得すればよいということではない。我が国の歴史・文化等の教養とともに、思考力・判断力・表現力等を備えることにより、情報や考えなどを積極的に発信し、相手とのコミュケーションができなければならない。子どもたち、一人ひとりの描く夢や志を大切にし、個性や可能性を伸ばし、目まぐるしい社会の変化に柔軟に対応できる力を身に付け、令和の時代も活き活きと、たくましく生きることのできる学びのため、皆さんからご意見を伺いたい。

野　中：９月１３日に大洲中学校で行われたＦＣＣの視察に行かせてもらった。始めはとても緊張した様子の生徒たちだったが、１時間もすると和やかにたくさん英語で会話をしていた。そういった場があれば英語力が伸びるのではないかと考える。たとえば、日本の観光地には多くの外国人がいる。そういったところで会話をさせてみるというのもいいと思う。自分の過去の経験から、実際に外国人と話をする機会があると英語を話すことに対する忌避感がなくなると思う。

永田奈：私もＦＣＣの視察に行かせていただいた。生徒が楽しく学んでいる雰囲気があり、ぜひ多くの児童生徒に経験してほしい。しかし、参加者が少ないと感じた。参加者の様子を見ると、最初は自信なさげに怖がっているような様子も見えたが、ＦＣＣの授業の終わりごろになると次回も参加したいという話をしていた。１回目の参加がポイントになるのではないか。募集に伴う広報の仕方が気になる。ＩＣＴを教育現場での活用だけではなく、学ぶきっかけにも応用してみてはどうか。紙ベースだけでは実際の授業の楽しんでいる様子が分かりにくいが、学んでいる様子を映像に撮ってＱＲコードなどから全生徒が見られるようにしたら、ＦＣＣの授業の雰囲気がわかり、敷居の高さが取り払われ、参加する意欲につながるのではないか。そのような動画コンテンツがあったらいいと思う。２点目として、教員の教育力を高めるという話があったが、ＡＬＴをとりまとめるＦＣＡを配置した藤枝市のＡＬＴの制度がとてもいいと思う。古参のＡＬＴが新参のＡＬＴに対して教育をして育て上げている。それぞれのＡＬＴの役割というのが明確になっているのがとてもいいと思う。

市　長：今のやり方ではＦＣＣに参加する生徒は少ないと思う。やる気のある子だけでなく、全員が参加できるように広報の仕方を工夫してもらいたい。「中学を卒業するまでに英語での簡単なコミュニケーションをとれるようにする」というのを目標にしているのであれば、全員参加につながるような工夫をしてほしい。

永田恵：ＦＣＣに視察させていただいた際、ＡＬＴの指導者について注視させていただいた。中心となるＡＬＴが非常にうまくＰＤＣＡサイクルを回していた。タイムキーパーをしていたり、テンポを上げるような声掛けをしていたり、静岡に関する内容で話をしていたり、楽しいと思わせる雰囲気づくりをしていた。最後、生徒に感想を書かせる時間があったが、生徒が英語で書いていて、英語で書いてみようという気分にさせていたことが素晴らしいと思う。

福　與：藤枝市の教育では教室の中だけではなく、Fujieda English Camp やＦＣＣなどのイベントで英会話をする機会があるのがいいと思う。話しかける意欲を育てる場になっていると思う。資料１３ページにあります、グラフについては、算数や国語に対して英語は明らかなギャップがある。これは課題であり、おそらく、本市だけでなく全国的な特徴であると思われるが、この小学生の肯定的な気持ちを中学生になっても持続できるような取り組みができるといいと思う。
中学校の校長を務めていた時、きっかけがあってＡＬＴと話す機会が持てたが、ほかの教員は英語の教員でないとなかなか話をする機会がなかったと感じた。職員室の中でも教職員がＡＬＴと親しく話をする機会が限られ

てしまっているのではないかと思う。教職員全員が英語で話しかける意欲を持つためには、職員室の雰囲気も大切だと感じた。

市　長：教員が外国人であるＡＬＴと親しく話をする様子を子どもたちに見せることが大切だと思う。そういう意味では教員の努力も必要だと思う。福與委員から英語の勉強に対する小学生と中学生のギャップについてお話があったが、教育監自身はどのように感じているか。

教育監：小学生の英語の授業は担任とＡＬＴと２人で行われる。その関係で担任とＡＬＴは授業の打ち合わせ等もあるし、授業でもやり取りがあるので、その様子が子どもたちに伝わっているのではないか。また、学ぶことが楽しいと感じるように、授業も展開されているので、小学生には肯定的な意見が多いのだと考える。中学校でも同様ではあるが、テストがあることで楽しいだけというわけにはいかないのだと思う。小学生の時の肯定的な気持ちが持続できるように、事業の方法も検討していきたい。

教育長：市独自でＡＬＴを採用し始めたときには１つのクラスで年１回くらいしかできなかった。現在では、週に１回は必ずＡＬＴによる英語の授業がある。私が教員だった時、ＡＬＴから他の教員から避けられていると相談されたことがある。当時の教員は英語を話すことに忌避感を感じていたのか外国人と話すことを避けているような傾向があった。心の壁がとても高かったと思う。その壁は時代とともになくなってきている。時代が変わって各学校にＡＬＴ１人を配置するようになったが、そのころの卒業生に会う機会があった時に「ＡＬＴとの授業がとても印象深かった。当時は英語の勉強は身につかなかったが、外国人と接する機会があったのが良かった。仕事で文化の違う外国人と話をする機会があっても、この経験のおかげでスムーズに話をすることができる」と話していた。英語の力だけでなく、異文化の人との触れ合いも重要なのだと感じた。しかし、英語の力もつけていかないといけないので、それは日本人の教員がどのように授業をするのかにかかってくると思う。ＡＬＴによる英語の授業につながるような楽しい授業ができるようになればいいと思う。そういうところの指導に教育委員会が入っていく環境を作ることが大切だと思う。

市　長：教育長の言うように、柔軟な考えの教員が増えれば英語に対して肯定的な考えの子どもが増えると思う。

○報告に関する意見

（１）部活動の地域移行について

市　長：エリア制の部活の指導は教員なのか。

教育監：基本は学校の教員以外の地域の人や専門の方の指導を考えている。教員も兼務という形で指導することができる。

教育長：部活動指導員で野球の専門は何人いるか。

教育監：２人いる。それぞれ藤枝・西益津・瀬戸谷エリアと葉梨・広幡・岡部エリアを担当している。

教育長：それ以外のエリアでは学校の教員が担当しているということでよいか。

教育監：そのとおり。

市　長：その２エリアのチームは大会には出場するのか

教育監：合同チームという形で出場する。

市　長：子どもたちがやってみたいことができないというのがないようにしたい。子どもたちはそれぞれの練習場所に自転車等で向かうのか。

教育監：そのとおり。そのためにエリアも隣接した地区分けにし、移動の際の安全性等を考えたエリア分けにしている。

市　長：藤枝市は合唱の街なので、ぜひコーラス部を増やしてほしい。また、教員の忙しさを理由に部活を作らないというのはやめてほしい。

教育監：子どもたちの数が減ると教員の数も減る。そうなると部活動数も減ってしまい、その結果、子どもたちの選択肢が減ってしまう。それを避けるためにこの部活動地域移行を進めている。